第2編　ＰＮＧ・イッスィー

（パプアニューギニア紀行）

‘02 年 05 月

写真１　ＰＮＧの子供達

パプアニューギニア（Papua New Guinea＝ＰＮＧ）はオーストラリアの北東に位置して、アイスランドに次ぐ世界で 2 番目に大きな島の東半分が国の領域になる。ラバウルのある国といえば理解しやすい人も多いことと思う。日本の 1.25 倍の面積に 390 万の人が住む。1975 年に英連邦の一員としてオーストラリアから独立し、エリザベス女王を元首としている。ここにはウィルヘルム山という 4 509mの山があり、オーストラリア・日本・アメリカ・ドイツなどから登山目的の旅行客が来るようであるが、ヒマラヤやキリマンジャロ程には多くの人を集めているわけではない。レジャー・観光の中心はダイビングやフィッシングであり、山登りはメジャーではないので同国の観光案内にも載っていない。

今年から毎週土曜日に成田～首都のポートモレスビー間に定期便が就航している。治安はあまり良くなく我々が通過する予定のポートモレスビーとマウントハーゲンは、外務省から発表される 5 段階の危険度指示では危険度 1 になっている。ちなみにイラクなどは、多くの地域が最も危ない危険度 5 になっている。

１．ピジン語

ＰＮＧでは、公用語は英語であるがピジン語を共通語としている。その昔、太平洋のフィジー・東南アジアのマラヤ･インドネシアなどには､なまこなどの海産物の集散地となった港があった。そこに集まるさまざまな民族の漁師や公益業者は、どうやって取引の会話を成立させたかというと、取引の指導権をもつ英米人の英語（英単語）を母体としながら、語順（文法）については、漁師たちの母国語のそれが使用される、奇妙な“混合言語”が生まれたのである。アフリカ大陸や中東・中国などでもこれに似た言語体系があるようである。（柳田邦夫著“「人間の時代への眼差し」講談社文庫より引用）

最高の高山病対策はゆっくり歩くことである。慌てて歩くことを戒めるために、ヒマラヤでは“ビスターリ”･キリマンジャロでは“ポレポレ”という言葉が有名であるが、ピジン語でゆっくりは“イッスィー”である。この文の表題はこの言葉をとったものである。

２．ウィルヘルム山の登山風景

成田を 21 時に飛び立ち、首都ポートモレスビーで国内便に乗り換えてマウントハーゲンへ移動する。ここでとんでもない問題に遭遇する。メンバー中の、一人の女性の荷物が無いのである。後で解ったことであるが、ポートモレスビーからの乗り継ぎ段階で、なんとラバウルへ運ばれてしまったらしい。現地のエージェントが最低限の登山用具をそろえてくれたが、やられた人にとっては自分にフィットしない道具で厳しい山へ臨まなければいけないということは、ごめんなさいで済むことではない。マウントハーゲン飛行場では、大きな顔の中にさらに大きな目と鼻を持つ人たちが、到着した我々を見守っている。危険度１地域という先入観からちょっとビビる。彼らがボーと立って我々を見続けているのは“物乞い”が目的であると思ったが、手を伸ばしてくるようなことは無い。それどころかスタートした我々の車を、家族総出で手を振ってくれる人達までいる。こんなことを含みながらこの日の宿泊地“ベティーズ・ハウス”を目指して、我々がジャンピング・ロードと名付けたガタガタ道を 4 時間余り車で移動する。途中、こんなに人がいっぱいいるのかと驚かされる。観光地と思っていたが我々異邦人が珍しいと見えて、みんな車の中を覗き込む。この日は日曜日であるので、敬虔なカトリックの多いこの地方の人たちは教会へ行くために出てきているので、こんなに人が多いようである。

写真２　家族総出の見送り

ＰＮＧは１月から４月が雨期であり、5 月はそれが明けたばかりであって、まだ天候は不安定である。出発前にインターネットで調べた世界の週間天気予報では、ポートモレスビーはずーと雨／曇であった。天

気にはあまり期待しないほうがよいという覚悟で臨むこととした。

登山基地となる町のケグルスグルにあるベティーズ・ハウスは 50 歳ぐらいと思える黒人女性のベティーさんが経営者である。周りにはかなり広い面積の畑も持ち、実力者である。早朝、写真３に見るようにたくさんのポーターが集まってくる。ここでベティーおばさん配下のポーター頭が一人ずつ呼び出して荷物を与えて、代わりにその労働代価になると思われる切符を渡す。重さや荷物の数で切符の大きさも違う。ポーターは穏やかな表情で、指示された通りに荷物を受け取って下がっていく。仕事にありつけなかった人たちも、表情は同じであり淡々としたままである。我々お客様は、雨具や防寒具などと嗜好品程度のみを小型ザックに入れて行動する。寝袋や食料などの重いものは全て現地人のポーターが運んでくれる。また山頂へ向かう時は、ポーターより１ランク上の現地人ガイドも同行してくれる。このようなシステムはヒマラヤなどの有名登山観光地と同様であるが、ほとんどのポーターが裸足であったり荷物の持ち方もまちまちであり、洗練されたイメージは無い。しかしニューギニア高地人の山での強さは有名であり、恰好よりも実力という感じである。滑りやすい道でも、高山のガラガラしたきつい勾配の道でもお構いなしに歩けるバランス感覚は天性のものでありすばらしい。私が担いだら“ヒーヒー”いうに間違いない荷物でも、ひょいと肩に担いでおまけに別の荷物も手にぶら下げている。彼らを前にすると、自分が山登りには自信があるなどということは間違っても言えない。

写真３　集まったポーター達

３．ウィルヘルム山登頂

高度３ 550mに位置するピュンデ湖の辺にある避難小屋のような無人ヒュッテが山頂への前線基地になる。登山開始 2 日目、夜中の 12 時に起床の合図を受ける。朝食（深夜食？）の後、1 時に出発する。ヨーロッパ人が開発した登山コースは、最終アタックはこのように深夜行動をする方が普通である。最も日本だって富士山の登り方は一緒である。ヨーロッパ人も山頂でご来光を拝み万歳三唱でもするのであろうか。前日はぱらぱらと雨模様の中の行動であっ

写真４　ピュンデ湖の ヒュッテ

たが、この夜は満天の星空である。定年前には中学校で理科を教えていたという元女性教諭が、驚くほどの知識で星座や星の名前を教えてくれるが、私には記憶に入る以前の問題でまったく覚えることが出来ない。どこかの未開人で 5 つ以上の数はすべて“いっぱい”で片付けてしまう人種がいると聞いたことがあるが、星に関しては私も同類である。ただ“星がいっぱい”で片付けてしまう。

懐中電灯の灯りでひたすら歩き続ける。案内書ではピュンデ湖の上にあるアウンデ湖からしばらく急登が続き、その後巻き道をしばらく行くと書いてあったので、急登が終わった後には平坦な道を予想していたのに対して、登ったり下ったりの道が延々と続き、ちっとも楽をさせてくれない。6 時過ぎの日の出を過ぎてもまだしばらく登り下りを繰り返して、頂上でのご来光どころではない。いいかげん嫌気がさした頃、ようやくウィルヘルム山の山頂が見渡せる場所に出る。ここまで来ればもう一息で、最後の急登を登り切って 4 509mの山頂に立つ。心配された天気は、まるで我々のために晴天の一日をためておいたというごとくに晴れ渡った。ふつうの山登りであれば、“さあ登ったぜ、後はちょいちょいと下るだけだ。”というところであるが、滑りやすく登り下りの多い稜線は、下りといえども十分歯ごたえがあることを登りの最中に予知していた。案の定厳しい下りが待っていた。このとき一寸した難場があると、高地人のガイドは我々の前から・後ろから・下からと、歩行をサポートしてくれる。私も彼らのサポートにどっぷりと漬かってしまった。山登り歴も 40 年近くになるのでなんとなく自分もベテランであるという気になっていたが、この日の私の歩き方はまったくの素人同然であった。山を下る時のコツは斜面に対して 90 度の角度を保つようにすればバラン

写真 5　山の日の出

写真 6　ウィルヘルム山頂

スよく歩けるなどということは百も承知なのであるが、バランスを崩して転がってしまうことを恐れるあまりヘッピリ腰のかえって滑りやすくなるような歩き方をしてしまった。

４．青春とはなんだ

日経新聞朝刊の最終ページに「私の履歴書」というコラムがある。各界の功なり遂げた人が一月単位でその半生を語るものである。誰が書いた時のものであったか忘れたが、定年を迎えた時に外国にいたその人が自分の息子に対して、“私は今、青春の中に居ます。”と書き送ったことを、その時からさらに 20 年近く過ぎた時に、“このようなことをいえた自分を誇りに思う。”というように述べていた。なかなかいい感覚だなあと感心したので、自分が還暦も近いというのに青春を語るなんて爆笑ものだということは棚に上げて、盗用させてもらおうと思っていた。私は海外の山へ登ったときには、親しい人にその土地の消印が押された絵葉書を出すことにしている。いい機会であると思い、“ウィルヘルム山の青空は、私が青春の舞台から離れることを許さないというがごとく、輝ける光を放っていた。”とアレンジして出すつもりでいた。しかし今回の山行における“ヘッピリ歩き”は、実年齢通りのジイサマ歩きそのものであり、せっかく用意したキャッチコピーは 1～2 人に使ったに過ぎなかった。勇気を持ってバランスのとれた歩き方をすることが出来なかった。私は、青春とは年齢によって決められるものではないという考えを持つが、意識だけ若がることが青春であるとも思わない。バランスの取れた歩き方ができるだけの体力に裏付けられた意識でなければいけない。今回、思い通りの歩き方が出来なかったら次の機会にもう一度挑戦して取り戻せばいいというものではない。おそらく 3 回挑戦したって結果は同じである。たとえ 10 回挑戦してだめでも 11 回挑戦する意欲を持って、それが成功したといっても、青春の中に居るということにはならない。今やることの一つ一つがだいじなのである。

５．ＰＮＧの小型飛行機

ＰＮＧへ来た目的は、ウィルヘルム山への登頂であったが、成田～ＰＮＧ間の飛行機は週 1 便であるので登頂後はリゾート地のカラワリロッジへ移動する。ケグルスグルのような小さな町にも飛行場がある。この飛行場は、ヒマラヤのルクラ飛行場と同じように滑走路は斜めの野ッ原である。（“ヒマラヤ・ビスターリ Ｉ”参照）滑走路が斜めの飛行場なんてルクラの専売特許かと思っていたらそうでもないらしい。ＰＮＧのような土地が広くて人口密度の低い国では道路網を作るよりも飛行場を作って、小型飛行機を移動手段とする方が合理的である。

写真 7　ケグルスグル飛行場

飛行場へ向かう途中、手をつないで歩く親子ずれの後姿を見た。私の頭に童謡“みかんの花咲く丘”の 3 番がよぎった。

いつか来た道　母さんと
一緒に眺めた　あの島よ

とっさにカメラを取り出してシャッターを切った。隣を歩いていたメンバーも同じような印象を受けたようであった。

12 人乗り位の飛行機でリゾート地であるカラワリロッジのある飛行場に着くと、そこで迎えてくれたのは写真 9 に見るようなすっぽんぽんさえ含む子供達であった。この子供達を見た途端にまたもや私は、かつて他のいろいろな国で見た“物乞い”を連想してしまった。しかしここでも彼らは、これらの人たちの特徴であった、“何かをくれ”という意味の手を差し出してくるしぐさを全くしない。集まってきてただ見ているだけである。

写真 8　手をつないで歩く母子

写真 9　カラワリ飛行場の子供達

6．カラワリロッジ

カラワリロッジはカラワリ川に面している。カラワリ川は、広いところは 150 m もの幅があり勾配が少ないので、波すら立つことも無く泥の色をしたままゆっくり流れる。この地域では、川は交通手段としても重要な役割を果たしている。我々観光客は飛行場に着くとすぐに船に乗ってロッジのある船着場へ向かう。観光客だの飛行場などといっても日本での常識を当てはめてはいけない。ここに滞在した 3 日間は、我々 11 人の観光客のみのために、飛行場も船もロッジもそこの従業員も存在したのである。ここも飛行場といってもただの野ッ原である。我々の泊まるロッジ以外には現地の人の家だけがあり、もちろんここの人達は飛行機などに乗ることはない。船で川を遡って行くと、手漕ぎの小船に乗った人たちが懸命に船に近付いてくる。これを見止めると船長はエンジンをいっぱいにふかす。

写真 10　カラワリ川の船

この川は波がないので、エンジンを積んだ船が残す波で、彼らは波乗りに興じているのである。

ロッジへ到着後夕食までの間に、近くの部落へ普段のままの彼らの生活を見学に行く。さくさくの木を分解して、パンを作ったり葛湯のようなもの(彼らはプリンと呼んでいた)を作る工程を見せてくれた。彼らがそのようなサービスをしてくれた当然の代価としてみやげ物の店が広げられた。木彫りのフェイスマスクやキーホルダが並べられた。世界中の他の観光地で見るような、客への猛烈なアタックをかけたりすることは決してない。“それはいくらだ”と聞くと、“いくら“という答えだけが返ってくる。その値段がばかばかしくなるほど安いので、値引き交渉などということをする気にもならない。彼らの態度からは少しでも利ざやを上げて、楽して儲けようなどという様子はうかがえない。値引き交渉などをしたら、彼らの美しい心に対して自ら恥じらいを感じてしまうのではないかと、思ってしまうほどである。

カラワリロッジは、かつては精霊の家として作られたものを改良してロッジとしたものであるということで、柱やテーブル・椅子などいろいろなものに、彼らが得意とする木彫りの彫刻が施されている。オーナーはオーストラリア系と思われる大柄な白人である。いつも缶ビールを片手に持って快活な挨拶をしてくれる。人は悪くはなさそうであるが、私のメチャクチャな英語が理解できないと、すぐにツアーリーダーを呼べという態度をとる。以前にニュージーランドでも、最初はニコニコと付き合ってくれていたのに、こちらの英語力が弱いのでだんだんと相手の口数が少なくなっていってしまったという経験を持つ。そういった面ではアメリカ人は付き合いやすい人が多いように思う。話し合っている相手

写真 11　手こぎの船を操る子供

写真 12　さくさくの木を加工したパン造り

写真 13　カラワリロッジの木彫が施された椅子

に正対して、相手の立場に立って応対してくれる人が多い。解らないでいると、いろいろ単語を代えたりして解らせようとする。こっちが身振り手振りを交えても解ってもらえないときには、最後の手段として日本語で押し通す。数日間同じ山を歩き続けても、こっちが解ろうと解るまいと勝手に喋りまくっていたりする。それでも心は通じるんだよ。

写真 14　シンシン踊り

７．ＰＮＧの人々

翌日はまたカラワリ川を遡って、まずシンシン踊り（ＰＮＧの部落の人々が集団でやる踊り。Sing Sing が訛った呼び方といわれる）を見せてくれる部落を訪ねる。船が部落の端に差し掛かると、子供達がけんめいに川岸を走って船を追いかけて併走する。村の人々は、我々の観光会社がそれなりの金銭を支払っているので、時間を割いて踊りを披露してくれるものと思われる。そんな訳であるから彼らの表情からは、心底楽しんでいるようなようすは伺えないが、かといって義務で踊らされているというような投げやりな態度も見えない。やっぱり踊りは、祭りにやるものかな。

写真 15　カラワリ地方の学校

踊りの後は、また船に乗って別の部落へ行く。この土地の学校に案内してもらう。校長先生は、アメリカ映画俳優のモーガン・フリーマンを思わせる風貌をしているジェントルマンである。（写真 15 の最後列の人）彼は生徒全員を起立させて、国歌とこの国ではポピュラーと思われる歌の合唱を聞かせてくれた。過去に何カ国かの学校を見学させてもらったことがあるが、国歌を聞いたのは始めてである。彼らの歌が終わると、日本の歌を歌えとのリクエストがあり、“上を向いて歩こう”で応じたがあまり受けなかった。誰から教えられたのか解らないが、後で教室から出たときに、“もしもし亀よ”を口ずさむ子供達がいた。我々全員に彼らによって予め用意された、色とりどりの花がちりばめられた冠がかぶせられた。ここの子供達はみなこざっぱりとした服を着ている。

教室から外へ出ると、またはだかんぼうの子供達の世界である。手のひらを差し出してハイタッチを求めると、彼らは手のひらをポンと合わせてくる。いっぱい集まった一人一人とハイタッチを交わす。左側の子供達とのハイタッチが一段落したので、右側の子の方に向きを換えると、私の左腕がコツコツとたたかれる。見ると、浅黒い顔の中に大きな目を不安そうに輝かせて、“僕にはしてくれないの”というように私の顔を見上げている。右手でハイタッチを求めると、一瞬にして彼の顔は他の子供達と同じように、いっぱいの笑顔に切り替わった。南国の太陽は木々の下をも明るく輝かせる。飛び跳ねながら船着場まで付いてくる彼らといっしょに歩いていると、自分の持つ明るい一面がすべて引き出される思いがする。

写真 16　村の子供達

写真 17　見送りに来た子供達

彼らに別れを告げて船が岸を離れてしばらくいくと、川岸にいた彼らがぽんぽんと飛び込んでくる。泳ぎながらさかんに手を振るので、こんなに別れを惜しんでくれているのかと思う。彼らを認めると、船長はいっぱいにエンジンを吹かして彼らに近づく。危ないじゃないかと思うと、すーとエンジンを切る。こんな事が 2 度・3 度と繰り返されるうちに解ってくる。なーんだ、小船に乗った人たちがこの船の起こす波で楽しんでいたと同じように、彼らも波乗りが目的だったんだ。なんでもかんでもノスタルジックに考えてしまうなんてばっかじゃなかろか。しかしこの船長さん、小船や子供達が近づくとエンジンを吹かしたり止めたりのサービスをするなんて、粋だねー。

８．カルチャーショック

今の日本などのいわゆる文化国家で、この船長さんのようなことをしたら、就業規則違反ということになってしまう。しかしこの国で受けたカルチャーショックはいったい何なんだ。（カルチャーショックとは、発達した文化に対して自分の遅れを認めたときにいうのかと思っていた）ここでは食べ物もそこにあるパンや果物をもぎ取ればよい。1 年中温暖な気候は、衣類などを必要としない。すぽんぽんが自然なのである。争いごとが起きる筈が無い。帰途にポートモレスビーの博物館に寄った時にも、楯はあったが剣は見なかった。弓矢や槍はあったが、狩猟や魚取り用にしか見えない。我々文化国家というやつは、競争することを良しとしている。原子爆弾やコンピュータは戦争から生まれ出て来ている。我々の文化は殺戮の結果の産物であるなどといっては、大多数を占める善人の先人に対して失礼なこととは思うが、そんな短絡的な気にもなってしまう。日本では、小さな政府・民営化による競争社会が叫ばれているが、銀行や大手半導体メーカーの合併などによる巨大化を見ていると疑問も起こる。私の経験では、組織なんていうものは大きくなるほど管理が厳しくなり、いわゆる官僚化する。これでは民営化なんていったって、少し小さな政府がいっぱい出来るだけになってしまうのではないか。欧米の国々が日本に対して経済の回復をやたら迫るのでこのような状況になるのであろうが、日本のバブル時代にビルなどを高値で買い取らせてバブル崩壊後に安値で取り戻したりした、濡れ手で泡が忘れられないのであろう。ＩＳＯが提唱する業務内容の書類化などは、購入者の保護という側面からは良いことではあるが、それをやることで技術力の向上が出来ると勘違いしている人が多い。私はマニュアル人間が増えることに危惧感を持っている。欧米社会の持つ、一人の天才が多くの庶民を支配する構造を真似する必要なんか無い。日本の技術社会の特徴は、たくさんの普通の人たちによる身近な努力や工夫が社会の進歩を支えているところにあるはずだ。工夫を忘れた日本人なんて、臭いも無ければ音もしないおならみたいなもので、誰もそんな存在を認めたくない。しかし最近はそんなやつが多い。あの校長先生は自分の国の文化をどう考えているのであろうか。生徒に洋服を着させていたところを見ると、やはりこの国でだけ通用する人間に留まらず、世界に通用する人の育成を望んでいるのであろう。

９．エンディング

カラワリロッジからポートモレスビーへの飛行機を待つ間、船の中で世話になったガイドと雑談を交わす。“いくつだ”と聞くと 38 歳だという。“奥さんの年は？”の質問には、一生懸命考えてから答えた。さてはと思い、”How many wives do you have ？“と聞くと、”Two”と答えやがった。そうなるとここにだって、何らかの形での争いっていうやつがあるよ。それがなけりゃ社会じゃないよ。絶対ある。あるに違いない。あらなければならぬ。あってくれ。お願い！

いきなりガイド氏が空を指差して“来た”と叫ぶ。飛んでいた鳥のことを言っているのかと思ったら、“皆さんには見えないだろうが、飛行機が来たのが見える。”という。それから数秒後、我々にもやっと見えた。みんなおまえと同じように目がいいのかと聞くと、そうだと言う。ＴＶでよく見るアフリカ出身のサンコンさんの視力は 6.0 であると聞くが、彼らも同じようであるのに違いない。彼らには彼らの生活の場があり、我々は我々の生活に戻るのが定められた道なのであろう。俺の住むところは、やはり日本しかないようだ。もう帰ろう。